

# ファウスト的人間

馬場 喜敬

On the Faustic man

Yoshiyuki BABA

Goethes Faust influenced upon not only literature, but also philosophical currents -from the german idealism to the existentialism in the twentieth century. What can Faust do, or what must Faust do in nowadays is the remained problem to us.

## 1

思想史、精神史、文化史、また伝記や人間学的論文、或いは民俗学的論説の中でさえ、われわれはしばしば、ファウスト的 *faustisch* という語に出会う。

ファウスト的雰囲気 *Stimmung des Faust*, ファウスト的魂 *faustische Seele*, ファウスト的衝動 *faustischer Drang* の如く。それではその中にどういう意味を読みこんでいいのかわからない。

「ファウスト的」はファウストなる人物に由来するわけだが、周知の如く、それはもと伝説中の人間であった。われわれは伝説の霧のなかに明確なファウスト像を洞見することはできない。*faustisch* が、上記の如く、学術的著作・論文上の共通的な一用語となるためには J. W. Goethe ゲーテ (1749—1832) の “Faust” の出現が必要であった。

哲学史家 F. Überweg (1826—1871) はのべている (*Grundriß der Geschichte der Philosophie* 3 Bde 1863—1866)。

わが国の (=ドイツの、筆者) 古典文学期に成就された生活意識の変革は非常に徹底したものであって、これと比較しえられるのは、ルネッサンス時代のヨーロッパ文化を意味する層において成就された変革くらいのものである。超越的権力の圧迫から生を解放するということが、つまりカントにあっては未だ非常に強くはたらいていた従来の宗教的世界観から離脱するというのが中心の契機であったのである。ゲーテの人柄においてほど、この過程が純粹且つ完全に成就したところは多分ほかにはないであろう。道徳的なもののほかに、学問と芸術とを以て、人間の達しうる最高の価値 (神的なもの) とみる世界観がゲーテにおいて成立したのである。

学問と芸術とを有する者は / 宗教をももっている。

学問と芸術とを有しない者は / 宗教をもて。

それまでキリスト教から離れることのできなかつたすべてのもの——罪の意識、無価値観、現世否定——は放下されたが、それでも幸福論的唯物論には席をゆずらなかつた。カントについて起った観念論的 = 思弁的時期の発生にもっとも深い原動力を与えたのは、この生活心術であり、それとともに実はわれわれの古典文学であった。もしも外部から生活を通してこのような影響がなかつたとしたら、当時行なわれた哲学の発展は不可解となるどころか、多分不可能であったといえるであろう。

観念論の諸体系は、畢竟ゲーテの時代の有していた豊富な価値体験を、哲学的自覚に高めようとする試みであった。〔19世紀・思弁的諸体系の時代・序章〕

この一見過大とおもえるようなゲーテ評価は、ドイツ思想史、精神史を内面的に *nacherleben* するにしたがって、その真実性が疑われえなくなってくる。いわゆる *der deutsche Idealismus* (ドイツ観念論 (Fichte-Schelling-Hegel)) にとどまらず、ユーバーベークも指摘しているように、Schleiermacher から Schopenhauer までにいたる範囲において、このことはあてはまる。のみならず、さらにその範囲をこえて、特に Schopenhauer を起点とする思想の一系譜 (Schopenhauer-Wagner-Nietzsche-Th. Mann) においても、独特の色濃き *nachspüren* が可能であるし、さらに Vaihinger や Brentano をも貫くゲーテからの照射を感じるのであろうし、20世紀の哲学者といてよい Jaspers にいたるまで Goethe との関連において、その哲学思想の全内容 (人生論的内容!) が明瞭に理解されうるのである。

そのような Goethe が生涯をかけて書き上げた名著 “Faust” (1774 *Urfaust*, 1806第 I 部, 1831第 II 部完成) の人間像に因んで、ファウストの人間は、近代から現代にかけて、“*Homo universalis*” 的に——この語はもともとは Leonardo de Vinci に照準していわれたものとおもわれるが——尊重されてきた。かりにわれわれが Faust の如くなれないとしても、それは Faust の理想としての価値が失われるものではない、という考え方すら、われわれの体験のうちに含まれていたようにおもわれる。ではそもそも Faust 的人間の本質とはいかなるものであり、また、過去との断絶が、日々激しいといわれている今日のわれわれの時代と Faust 的人間との折り合いはどうなっているのであろうか。半ば反時代的 *unzeitgemäßig* になりつつあるかにみえるこの問題を、まさにこの理由においてとり上げてみようとする。

## 2

a. 最初に、1587年刊の *Faust-sage* の集大成本に基づいて、*Faust-sage* の典型的な形を略述する。(以下本節、紙面の都合で割愛)

b. *das Autobiographische* がその作品のすべてを貫いていると批評される Goethe において、「Faust」の中にも、自己の体験・思想・感情・心理などの数知れぬものが *hineingeheimnissen* されていることがみとめられる。他面 Goethe は「*Dichtung u. Wahrheit*」という自伝たることを表面にうたった作品においては、その中の「創世記」を扱った章の例の如く、自己の発展に人類史的衣裳をまとわせることをためらわない。Faust の如き伝説上の人物に自己を投射しながら、これを自伝と化すことは軌を一にする創作態度である。若い頃の *Urfaust* に始まり、自己の成長に従って、夫々の時点で作品を「発展した自己の水準に引き上げるべく」苦闘しながら壮年から晩年にわたって第 I 部、第 II 部と書き進み、第 II 部の最後の数節は80才を超えて間近かな死を予感しながら書きおえた、という事情は、この作品の *das Autobiographische* の生成的過程そのものを象徴しており、Goethe の最終的成熟の生ませましい独自性を告げるものである。先の *Faust-sage* と比較しながら Goethes Faust の全貌を展望する。

第 I 部 夜、書齋の間の Faust の独白から始まる。

Habe nun, ach! Philosophie/Juristerei und Medizin.

Und leider auch Theologie!/Durchaus studiert, mit heißem Bemühm.

にも拘わらず何ほども賢くもなっておらないし、満ち足りたおもいは皆無である。毒を仰ぎたい心境のときに、復活祭の歌が幼き日の清浄な魂の記憶を甦らす。が過ぎ去った日は戻らぬ。再び向う Bibel の一章句が半生の悔恨を一層苦々しいものにする。Im Anfang war das Wort. (=logos) この Wort とやらのために一切の辛酸は須臾の間の夢と化してしまった。焦立たしげに Faust は

das Wort をかき消して、Im Anfang war die Tat と書き直す。“die Tat” 行為！ しかし行為のために一体どれだけの命数が残されているのだろうか。

「おれの胸には、ああ、二つの魂が住んでいて、／それが互いに離れたがっている。／一方のやつは逞しい愛慾に燃え、／絡みつく官能をもって現世に執着する。他のものは無理にも塵の世を離れて、／崇高な先人の霊界へ昇って行く。」

そこに悪魔メフィストフェレスの出現である。かれは謎めいたことをいう。“Ein Teil von jene Kraft,/Die stets das Böse will und stets das Gute schafft”。

契約が交わされる。ファウスト「賭をしよう。——私がある瞬間に対して、留まれ、／お前はいかにも美しい、といったら、／もう君は私を縛りあげてもよい。もう私はよろこんで滅びよう。／もう葬いの鐘が鳴るがいい。／もう君のしもべの勤めも終りだ。／時計はとまり、針も落ちるがいい、／私の一生は終りを告げるのだ」。

契約の内容は Faustsage とは大へん異なる。知識欲と体験欲、認識による向上と生命感の享受という二元的衝動を一人格の中に包蔵している Goethe=Faust (その名も Heinrich Faust) は、同時にその何れも無限なものだから決して完全には満されないのだという予感をもっている。そのようないやしがたい渴望の自覚が、かえってメフィストとの賭けに負けることはあるまいという逆説的な希望となっている。

メフィストは Faust をうながす。「先ず小世間を見て、次に大世間へ出かけましょう。」

その小世間でのこと。「ライプチヒ市のアウエルバッハの酒場」「魔女の厨」……「ワルプルギスナハト」。しかしその中心事件としてはかの周知の〈グレートヘン悲劇〉が待ちうけていたのである。

## 第Ⅱ部 (この構成を通じて Faustsage とのへだたりはきわめて大きい)

清純なグレートヘンを罪に陥れて刑死に至らせた Faust は、第Ⅱ部の冒頭「風趣ある土地」の自然の中に傷ついた魂を安めている。「人生は彩られた映像としてだけ掴めるのだ。」行動の情熱は鎮静し、Faust は観照者として、すべてを永遠なるものの象徴として眺めようとする境地にいるかのごとくである。そういう Faust にメフィストは大世間を経験させようと画策する。

先ず「神聖ローマ帝国の宮城の玉座をとりまく世界」。「宏大な広間」で皇帝に魔術師・知恵者の実を示した Faust は、皇帝からパリスとヘレナの姿をみせるように頼まれて「母たちの国」行きを敢行する。そこへ至る「鍵」は手にすると膨脹するしろもの。首尾よくいって「騎士の間」でその出現が披露される。その際 Faust の方がヘレナへの恋愛にとられるが、その場は爆発によって幕を閉じる。

「円天井の高いゴシック風の狭い部屋」すなわちかつての Faust の居室。ワーグナーが碩学の教授となり、一学生が新進気鋭の学士となり Fichte 流主観的観念論をふりまわしている。「中世風の実験室」でワーグナーは人造人間の製造にとりくんでいる。Paracelsus の衣鉢をついで、レトルトに入れた原料を蒸溜し、結晶によって化学的にホムンクルス (小人間) を造ろうという。それは成功した。ホムンクルスの心力すばらしく千里眼的に人間の心の中を見すかす。隣室のねむっている Faust の心の中もみすかして、メフィストと協力して Faust をヘレナに合わせるべく古典国ギリシャにマントにのせてとび立つ。——「古典的ワルプルギスナハト」。

さて、ヘレナと Faust の出会いの成就。一子オイフォーリオンの誕生。この少年はやがてギリシャをおそった蛮族に立ち向うべく両腕を翼のようにひろげて飛び立つが (あたかもイカルスの失墜のごとくに) 深い谷間に墜落してしまう。地の底から母をよぶ少年の声にヘレナも衣裳と面紗を Faust の手に残したまま冥界に去った。

再び愛は去った。Faust はヘレナの衣裳の化した雲に運ばれてドイツの高山の頂につく。Faust は、いま美的享受のときは去り、隣人のための行動が新しい生活の設計となっている。海岸沿いの一帯の荒涼たる不毛の沼沢地から海水をとり去り、新しい土地をひらき、人民のために理想的な国を築くこと。ここでもまたメフィストは力をかけて皇帝からそうした土地を与えられることが Faust に許される。

事業は開始される。土地埋立て。旧制度から解放された新国土建設。人が集まり、幸福な生活が営まれ、諸外国の船が出入りするに至る。しかし一つ蹉跌があった。海に面した丘の上に望楼をつくらうとした計画は、古い礼拝堂の存在にぶつかる。そのそばにはフイレモンとパウチスという老夫婦がすんでいた。或る日火事がこの二つを焼き払い、煙は4人の灰色の女を送ってよこす。「欠乏」「罪責」「憂愁」「困窮」。そのうち Frau Sorge は鍵穴から Faust の室にしび込む。Faust はいま100才に達し「現実の行為にこそ不死不滅が宿る」という信念にもえている。ところが「憂愁」はその Faust の顔に息を吹きかけ、Faust を盲目にした。

盲目100才の Faust は、しかし活動への意欲衰えず、内眼はさえる。臣下や人夫を召集して工事をいそがせる。気儘や安楽な生活を与えられたものとして受けとる気はない。日夜奮闘努力して国土を開拓し、自然の脅威なく、また権力者の搾取なき「自由な土地に自由な民と共に住みたい」というのが Faust の理想となる。……その実現は心眼に映るようになる。人生の意義ここにあり、という風におもわれてくる。Faust の口からもれるのは、「瞬間よ、留まれ、お前はいかにも美しい。」

賭けはおわる。Faust は敗れたか。ところがメフィストは死んだ Faust の魂をつかまえることができない。かれの理想をめがけた魂は天国に近くある。地獄に属さない。天から降りてきた天使の群れのまき散らす紅バラは悪魔たちのからだを焼き、その間に Faust の魂は天使に救い出される。かれの不断の努力は神の寵愛をもえた。

自力による努力と天上の恵み、この両者の結合によって Faust は救済されたのである。そしてかれの魂がいよいよ赦されて天国に入るために、かつての愛人 Gretchen の魂が、贖罪の女の一人として現われる。聖母 Maria に対し Faust の魂のために恩寵を乞うのである。永遠なる神の愛の象徴としての das Ewig-Weibliche (永遠なる女性) が、Faust の魂を導いて栄光の境へ昇る。

### 3

以上 Goethes Faust は、Faustsage の枠組からさほど隔っていない Marlowes Faust とはもとより、はじめて Faust の中に、認識(知識)渴望の故に悪魔と結合したとはいえただ単に非難さるべきではなき人間をみ、永遠の劫罰・地獄行きにおわるべきものではないとした Gotthold Lessing (1729—1781) より、さらに一步ふみこえたところにいる。

Goethe は Faust の救済を積極的に扱う。そもそも悪魔と盟約を結ぶ異端者 Faust は Christentum (Katholizität) からみると、断罪されることによってこそ一般人(信仰者)の救済にとっての反面教師たりうる。しかしあくなき認識意欲とその発展でもある不断の行動すなわち die Tat のあくなき信奉者は Protestantismus (Luthertum) の本義にかなうものである。がそれは Katholizität を代表する Maria のふところに抱かれる希求とはならないし、Katholizität (Maria) もまた das Wort への謙譲な帰依者をこそ愛するのである。しかしながらいま Katholizität (Christentum) と Protestantismus (Luthertum) のそのような対立を包越するかのように、或いは das

deutsche Christentum (=Luthertum) の新たなシンボルであるかのように、Faust の天国入りを迎えるものは Maria であり、Gretchen である。しかも両者はゲーテのいうところの das Ewig-Weibliche という、両者を包容するとき存在の夫々の体現者とみなされているのである。ここに Goethetum の独自性がある。

Freud から出発し、衆族意識・民族心理学的複合体について創見をもった C. G. Jung (1877—1961) は、「すべての古代ギリシャ人はオイディプスの面影を宿している如く、ドイツ人はみなファウストのおもかげをもつ」とのべている。独自性は普遍性に通ずる。Goethes Faust の誕生を通して、ファウスト的二元性とその自己超克、ファウスト的求道的生活心術を、近代的、deutsches Bürgertum 的自意識にもたらし去ったのが、その後のドイツ精神史の基調である。

a. I. Kant (1724—1804)。Kant は Lessing より5年前の生まれ、Goethe よりは25年前の生れ、Faust 誕生前の人間である。従ってここでは Kant が Goethe と共有している圧倒的な白熱的なルソー体験を指摘しよう。1760年代は Kant の思想発展上重要な意味をもっている ('62 Le Confession)。周知の如く Kant は自然 (史) 研究から、自負に満ちた学者の歩みを始めたのであったが、Rousseau (1712—1778) によって人間学的転回が起る (「美と崇高との感情に関する観察」自家用本余白に記されたかの有名な「覚書」ca 1764/65)。旺盛な知識欲によって集積された巨大な学識といえども生まな一人の人間の存在にまさることはできない。(いかなる者にてあれ) 人間への尊敬、これがこれ以後の Kant の心情を貫くのである。批判期の、先験的観念論をはじめ、定言命法の倫理学、美的及び目的論的判断力を考察する視座もここにある。しかしこれは決して初期カントと断絶のあるものではない。自然研究を通じて Kant の主要関心事は、人間をも含む宇宙の統一的根本原理であり、人間の宇宙における独自の地位であった。Kant が生れ育った家庭によって先ず接したところの敬虔な実直な生活を重んずる気風 (Pietismus, das eine deutsche Christentum) は晩年の “Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft” に相呼応する。批判期に中心をおきすぎた従来の Kant 像は修正され、Goethe-Faust と並ぶ Kant-Faust の塑像が建立されるのをわれわれは予見する。

b. G. Hegel (1770—1831)。Fichte (1762—1814)、Schelling (1775—1854) については省筆する。Kant に発する der deutsche Idealismus の完成者、der absolute Idealismus をうたい上げた Hegel の、その総序ともなった Phänomenologie des Geistes が書き上げられたのは1806年、丁度 Goethe の Faust 第I部公刊の年である。認識能力の批判ではなしに、「意識の経験」Erfahrung des Bewußtseins の内容を全く主体的な弁証法的論理によって整序し、個々の経験内容がすべて der absolute Geist の他在としての意味をもっていたことを逐次自覚する。der absolute Geist は感覚・知覚・意識・自己意識・理性の段階をへて、精神の段階にいたっては自己を(自然的世界の主体たるに加えて) 歴史的世界の主体として自覚する。このようにこれはまさに近代的自我の哲学的 Bildungs-(od. Entwicklungs-) Roman である。精神以降の章に Goethes Faust 第II部との親縁性を感ずることができ、また Goethe の Urphänomene と Hegel の das Absolute に内的類縁性があることは K. Levith がつとに指摘したところである。

Hegel 自身は、このあとにつづくかれの汎論理主義的哲学世界を Luthertum (Protestantismus) の哲学的内在化と称した。Logik は神の創造の叙述であり、そのような Logik の形成は神への献身なのである。

c. A. Schopenhauer (1788—1860)。Schopenhauer は主著 Die Welt als Wille und Vorstellung によって真向から Hegel 及び Hegel にいたる der deutsche Idealismus の伝統に対立する (そ

れらを形式的な、内容空虚な、絶対無意味の哲学と罵倒する)。そして Kant に還るべきをとく。Kant のいわゆるコペルニクスの転回による認識主観の客観に対する優位性の確立は、哲学史上不朽の業績であるという。しかしながらかれは全面的に Kant を肯定するのではない。Kant が悟性認識の対象は Erscheinung であり、Ding an sich は認識不能としたことをかれはとがめる。それはいままさしく Schopenhauer によって認識可能となるのである。かれはそれを名付けて der Wille という。「世界は意志である」。世界の根底は意志、生きんとする盲目的な意志であって、世界の万象はそのような意志それ自体の矛盾・混乱・葛藤・対立をはらんだ現われである。そのような様相は意志の発現が鉱物・植物・動物という段階をのぼるにつれますます烈しさをますが、人間にいたって発現する表象能力は、意志のこうした複雑多様な相を客観的に把握する。「世界は表象である」。この能力によって人間は科学及びより高次の芸術を生み出す。殊に天才は意志の直接の客観化であるもっとも高次の芸術すなわち音楽を創り出す。ここに盲目的な意志の逼迫を鎮静し、人間を救済に導く媒介がある。意志の自己否定こそは Nirwana (涅槃) なのである。

この主著の芸術作品の性格は一見して明らかである。Schopenhauer はこの中にたくさんの das Autobiographische を投入している。この情念過剰な浪漫的近代的性格は、母親との特殊な関係から生じた反女性的感情、Werther 的な自殺心情、天と地をのぞむはげしい二元的希求などを「認識し表現すること」によって脱却しなければならなかった。「Böhme と Voltaire の共存」「明晰さと幽明さへの共感」が随所にわかちがたく溢れ出ている。

d. Schopenhauer に源泉するいくつかの流れがある。そのうちの一つは哲学史の本流としてはとり上げられたことはないがとくに顕著である。すなわち Schopenhauer-Wagner-Nietzsche-Th. Mann という系譜。他はそれほどはっきりしたものでなく、従って流れとまではいえないかも知れないが、生存の根源の無意識性を強調した“Philosophie des Unbewußten”の Eduard Hartmann (1842—1906)。理論・科学・論理を自立的なものを見ず、意志・生の道具とみなす Fiktion の哲学者 Hans Vaihinger (1852—1933)。男性と女性の差異をヘニドの理論を基礎に Schopenhauer 的に誇張した Otto Weininger (1880—1903)。自我・理性を意識下の性的リビドーの影響をうけるものとした Sigmund Freud (1856—1939)。これらはみな——Freud の如く Schopenhauer の影響を否定している者も含めて——Schopenhauer に源泉する思想的現象とみとめられる。

e. Richard Wagner (1813—1883)。音楽という「もっとも形而上学的活動」に携った Wagner の思想的出発は Schopenhauer 体験にある。Leiden としての盲目的生からの解放は音楽が最高の手段であるが、Wagner の場合 Drama との結合をもとめる。Drama も、Drama におわらせることなしに Musik の中に止揚されてこそ Musik Handlung (楽劇) としての最高の形態をうるのである。

その Drama において Goethes Faust のモチーフは繰返しあらわれる。女性の純粋な愛による救いすなわち Maria=Gretchen=das Ewig-Weibliche による救いは Wagner の執拗に追求するところである。der fliegende Holländer, Tannhäuser, Lohengrin において。次いで Tristan u. Isolde においてわれわれは individualistisch, allzu individualistisch な体験のしらべをききとるが、かれ自身は Liebestod を超克してやがて Bayreuth に Der Ring の祭典をとりしきるのである。

f. Friedrich Nietzsche (1844—1900)。“Feind der Philosophie”がいる。真正の敵に値する敵、例えば Goethe、とニイチエがいうとき、かれは自らもっとも Goethe に近くあることを表明したのだった。概念の体系である哲学をこととするのではなく、文化の問題ととりくむ創造者たる

うとする。古代の Philologie を通じて古代ギリシャ文化の精髓をアッチカの悲劇にみ、その根底こそ、アポロ的の形相認識とディオニソスの混沌意志とを統一しようとする生命力にみちた音楽的精神であると感得する。かつてありしもの、唯一にして模範たる健全なる文化は再生されねばならぬ。この批判と展望に、Nietzsche の Schopenhauer 体験と Wagner 体験がつみ重なる。両者に、かつてありしものの再生への青春的情熱的期待となる。しかしこの自己否定の浪漫的形而上学やゲーテ的ファウストのモチーフの通俗化、浪漫的不協和音の音楽に、Nietzsche は否定の烙印をおさねばならない。すべてを醒めた眼で透視しながら、やがて既往の文化になかった地平を眺望しうる高みへと *versteigen* するためには、Nietzsche の 精神病的罹患が必要であった。——たしかに *Übermensch* (Nietzsches Zarathustra) とオリンポスのジュピター (Goethe) とはもはや同一ではありえない。

g. Thomas Mann (1875—1955)。Th. Mann は Schopenhauer 体験と Nietzsche 体験を霊的精神的な重要な体験とみなすが、*deutscher Bürgertum* の代表者とみなす Goethe を以て最大の師表とする。……Mann は作家的自己省察の立場から *deutscher Bürgertum* の没落の叙事詩を書かねばならなかった。「意志と表象としての世界」によって生を精神化した三代目 *Buddenbrook* のあとにはただ芸術にのみ捧げられた精神の持主が生れてくるが病気で夭折してしまう。Tonio Kröger はこのような没落の過程に抗する精神の愛による生への和解の宣言である。この立場のちに、かれが西ヨーロッパの *deutscher Bürgertum*. *deutsche Kultur* に対する攻撃とみなした第一次大戦のさ中に、かれをして *Deutschentum* の自己止揚のために *Betrachtungen eines Unpolitischen* を書かせた。ドイツの悲劇はこれにとどまらなかった。1933～1945年 *Nazismus* という狂気の跳染と壊滅。Mann はこれを *Deutschentum* の本質に根ざす悲劇とみる。そのことの予兆として Nietzsche という思想史的現象を拉し来り、Mann は独自の *Doktor Faustus* を書く。「ファウストがドイツ人の魂の代表者であるとすれば、かれは音楽家でなければならない。なぜなら抽象的で神秘的つまり音楽的なのが、ドイツ人の世界に対する関係だからである」。Nietzsche-Faust-Leberkühn は天才的作曲家である。しかしかれの最高の創造期における力は、若い頃ただ一度の娼婦との関係における梅毒の感染(悪魔との契約)に由来する。オラトリオ「ファウスト博士の嘆き」を自ら演奏中、かれは精神錯乱の闇の中におちいる。契約の満了は市民的生活をこなごなに紛糾することにおわるのである。

h. Karl Jaspers (1883—1969)。Kant に 永遠の哲学者をみ、Nietzsche (と Kierkegaard) に例外者 *der Ausnahme* をみる。例外者を凝視しながら理性を恢復する途を探求することがかれの *Existenzphilosophie* の根本モチーフである。Kant-Faust の如くかれはいう「世界はあたかも認識されんことを欲するかのようである」。科学的探究に限界はない(科学に聖域はない)。しかしながら科学知はその都度一定の方法に制約される対象知で、絶対知にはいたらぬ。存在そのものの神性は科学によって否定去られはしない。しかしこの存在の神性は啓示信仰(Katholität)によって直接的に明らかなのではなく、われわれの実存から発する哲学的信仰によってはじめて確知 *vergewissern* される。この *der philosophische Glaube* とは超越者に対する4つの二律背反的關係 *Trotz u. Hingabe, Abfall u. Aufstieg, Gesetz des Tages u. die Leidenschaft zur Nacht, Der Reichtum des Vielen u. das Eine* という緊張があつてこそ確固たるものとなる。*der Ausnahme* の誠実さに敬意を払いながらも、理性の明るさの中で、地上における(世界における)地上的なもの(世界内のもの)とのたえざるかかわりあい、人間の多面的奮斗努力の果てに、この永遠なるもの *das Ewige* (=die *Transzendenz, die Gottheit des Seins*) は人間(実存)。

を高めへ「ひき上げていく」ものとなる。

Th. Mannの *deutscher Bürgertum* の年代譜的にいえば、この4代目乃至5代目にあたる Faust は1914—1918年のあと、1930年代の初めにすでにこのような思想を表白したのであったが、1933—1945年、さきの Th. Mann の指摘したごとく *Bürgertum* の世界はこなごなに破砕されてしまった。

Jaspers のいう「教会内のプロテスタント」という立場は、教会 (Christentum) そのものが世界の中の存立が危胎にひんした状況において無の中にくずれいくものであった。今後「自由の土地に自由な民とともに住みたい」という晩年の Faust の願いが、哲学的信仰者の力とどう調和しうるかどうか。——今日の難問である。

#### 4

スペインの文化哲学者 Salvador de Madariaga は *Portrait of Europe* (1952) の中で、4人の典型的ヨーロッパ人をあげている。ドン・ファン、ドン・キホーテ、ハムレット、ファウスト。たしかにこの4人の近代人たちにわれわれは今日なお精神的血縁関係を認識する。しかし20世紀後半の今日の世界、近代自然科学と技術とが、社会の様相を深甚に変貌させた今日において、ファウストの姿は他の者とはちがった比重をもって立ち現われるのではなからうか。他の3者にみられないあくなき認識意欲こそは Faust のものであり、これが近代自然科学から巨大技術に至るまでのものをつくり出す原動力になったのだから。もとより原型的ファウスト Johannes Faust に科学についての明晰な意識があったとはいいがたい。時代はまだ Alchemie (錬金術)、weiße Kunst の段階であり、Johannes はそれをとびこえて schwarze Kunst へと走ったのであった。Alchemie から Chemsie (化学) へ、そして Newton 的力学への道はかなり直線的である。そして Heinrich Faust (Goethe Faust) はそれらを忽ち自己薬籠中のものとしているかの如くである。さらにすでにみた如く Heinrich Faust はこの無限の知識欲と人類への奉仕とを統合したのだった。

ところで今日、瞬時にして森林の中に滑走路がつくられ、僻村の海岸に石油コンビナートが建設され、水田が化して大工場となるのをみると、われわれは Johannes Faust の願望、Zauber Kunst の魔力・成果がまさに展開しているかの如き錯覚に陥る。そしてこの点のみが Faust の名とともに強調されるときには Th. Mann の *Deutschentum* の自己批判としての Faust 批判とは別に、A. Weber の「第三の人間」批判がそのまままさに Faust の全面的批判に通ずることともなろう。しかしそれもまた一面的である。

さて、日本において Faust はどういう状況であるか。鷗外によるファウスト訳稿は1913年(大正2年)に公刊されているが、それから20年後、1930年代、一人の若い評論家(亀井勝一郎)は、ゲーテを下敷にして「人間教育」を書きつづっていた。ゲーテを範として自己を形成することが普遍的な人間教育たりうるという信念に発したものである。昭和10年代という日本の政治的状况に照らして考察するとき、そのこと自体は再び問題とされうるであろう。しかしやがて1950年代~60年代に Tonio Kröger から出発したと称する世代においても、1冊の *Betrachtungen eines Unpolitischen* も書かれてはいないのである。Faust の本質的移植はむしろなお今後にある。われわれはその可能性を、例えば旧套を脱したホルクロア研究者や広い展望をもった文化人類学者の作業の中にみる。この作業の進展とともに、われわれは Heinrich Faust 氏に代る別の名の人間像を共同彫塑することになる予感ももつ。がそれは決して Heinrich Faust 氏の名譽を損うものではないであろう。